

## 今井・高橋両先生を囲んで

(2月10日、物理教室主任応接室にて)

木原太郎・橋本英典・小柴昌俊・

後藤英一・有馬朗人

編集係(小堀 巖・清水忠雄)

編集係: 今年4月1日に停年退官される物理教室の今井功先生と高橋秀俊先生を囲んで数人で気楽にお話しを伺うことに致しました。司会を木原先生にお願いします。

—————△—————

木原「今井先生は御存じの通り現在、図書館長ですが高橋先生も情報科学研究施設長を長くしていらっしゃいましたね。」

高橋「それはまあ別にそういうほどの役ではないのですが。大型計算機センター長の方は6年間しました。」

後藤「物理学会の会長は二期ですか。」

高橋「ええ、今井さんもそうです。だけど僕の2回目の時は丁度嫌なことがあって。」(笑)

今井「それはともかく、高橋さんの大型計算機センター長の方はまだいいと思うんですよ、仕事の内容を非常によく知っておられるから。ところが私の場合、図書館というのは何にも知らないんですからね。」

有馬「図書館ではどういうことを主にやっていらっしゃるんですか。」

今井「どうということかと言うと……何かいろんな相談ばかりですね。はんこ押しなんていうのがありますね。このはんこ押しは大したことはないですけどね。というのは大抵課長さん部長さんの判が押してあるから、まあ間違ったことはないのです。しかし、判を押さないような問題で相談をしなくちゃいけないことが沢山ある。この議論がなかなか難しい。これがかりに、流体力学研究所長であれば、わりに気が楽だろうと思います。高橋さんの場合の大型計算機とか情報科学とかいうように。図書館の場合は全くの素人ですから、そういう点でも実に、心細いというか、ジクジたる気持ちでそれが一番困ります。」

有馬「でもその前に、随分長い間、物理教室の図書の方の仕事をなさっていましたでしょう。」

今井「物理の図書というのは楽ですよ。つまり教室予算を使っても、それは結局我々が使うものですからね。」

その意味では無駄な使い方は、しないということやっていける訳で、このセルフ・サポーティングというのはいいと思うのですよ。予算が少なければ、少ないままに一番利用しやすいものを買うということを図書委員会で決めることですから。ところが、総合図書館の場合には、総合図書館独自の金というものがそうない。それでは他の部局からサポートがあるかという、これも少ない。部局の方でも手一杯だという。その点が難しい。しかし、余り図書館の話はしない方がいいですね。」

木原「今井先生と高橋先生の非常に似てるところと、違うところを言いますと、似てるところは、お二人共大変長く物理教室で仕事をなさいましたね。今井先生は、昭和11年の御卒業ですぐに阪大の方にいらっしゃいましたけれども翌々年の10月から、戻って来て下さり、ずっと、それ以後。それから高橋先生も昭和12年3月に御卒業して、4月からずっと。その他、余りなりを構わないという所が似ていますね。昭和12年というと私が入った年なんですけれどもね、高橋先生が教室に入って来られて、実験のオリエンテーションをなさった。そのとき、ズボンを時々もちあげる。それを未だに覚えています。お二人で、非常に違うところは、今井先生は髪が真黒で、高橋先生は随分お白い。」

今井「そうですか、なり振りが悪いというのは似てますか。」(笑)

木原「終戦後、随分長い間今井先生は、軍隊のドタ靴をはいていらっしゃった。」

今井「木原さんは、その頃、ちゃんとした靴をはいていましたか。」(笑)

木原「その頃の写真を見ると、僕は地下たびをはいていたようです。」

今井「僕は地下たびをはいたことはないけれども、下駄ばきで終戦後通っていましたね。冬の寒い時は冷たいんですよ、素足で下駄ばきで歩いてると。まあそんな

時がありました。」

有馬「今井先生の御講義も私達伺ったのですけれど、その頃は教科書が、少くとも日本語ではそんなに多くなかった。私達ノートを取ってそれが唯一の本になったのです。それをあとで眺めてみると、随分新しいことを、講義なさっていらしたのですね。」

今井「イヤ、僕は新しくないですよ。高橋さんの方でしょう。」

有馬「その頃、第一線のお仕事と講義というのは、かなり密着したものであった訳ですか、それとも、ある程度離れた？ 即ち教育と研究というのはどういう関係になっていたのですか？」

高橋「固態論の講義のことですか？ 研究とそう直結はしていなかったと思いますよ。こちらもやっぱり、本で勉強した知識を自分なりに整理して講義したんであって、自分で研究していたことは、あまり入っていなかったんじゃないかと思いますがね。」

有馬「たとえば、サイバネティックスの話をして頂いた覚えがありますね。」

高橋「それは電磁気学のときでしたかね。」

有馬「それから話が少し飛びますけれど、インピーダンスマッチングが自転車坂を上げるのに似るとか。」

清水「高橋先生は、いろんな種類の講義をなされてきましたが、はじめにそれを整理して頂けますか。」

木原「最初は固態論の？」

高橋「そう固態論です。あれは戦争中ですね、助教授の辞令が出るちょっと前からですから。落合先生が担当されていたけれど、その内の半分位をやったことがある。」

木原「前に、高木豊先生が講義されてましたね。」

高橋「ええ、そう、その高木さんが第二工学部に移って、丁度その後。」

木原「それから、電磁気学ですか。」

高橋「そうですね、ある年に講義のやり方を全面的に変えたことがありました。今井さんや宮本さんと相談して新しいカリキュラムを作って。」

今井「そうでしたね。」

高橋「それまでは1年目には大体物理数学と、力学と、物理実験学位しかなかった。それを、最初の1年目からもうちょっと物理をやるようにしようと、3人で相談をして。」

有馬「後藤さん、我々はその新しいシステムで習ったのですね。だいぶ、ごっそりあったですね。いろんなのが。」

後藤「固態論は別として電磁気の場合は、割合、教えら

れたことと研究とは近かったのではないですか？」

高橋「電磁気は、かなり近かったでしょうね。それからその前に電磁気特論というのを受け持ったことがあって、その時回路論をやったんだ。」

木原「それは本多先生がまだいらっしゃる頃ですか？」

高橋「ええ、勿論そうです。昭和24年ぐらいかな。」

木原「それからどういう講義を？」

高橋「その後、電磁気学はかなり長い間やりました。余りマンネリになるというので止めて、物性論をやったことがありますね。また、それから物理数学。そしてまた電磁気II。これは丁度紛争のあと授業再開のときだな。それから、最近は教養学部の方の物理数学をやりました。その前に物理数学の一部分で数値計算のことをやったこともある。」

清水「私達の頃は、物理数学を先生から教わりましたけれど、あの時は特殊関数論でしたか。」

高橋「そうですね、それから一度だけ力学をやったんだ。それは大分みんなを面喰らわしたらしいが、要するに物理学汎論ですな。あれを聞いたのがいま学習院にいる江沢君なんかです。それから後これは1年生にやるのは無理だというんで大学院の講義にしました。要するに、物理はすべて力学だというようなことを言ったんだ。」

木原「力学的自然観！」

有馬「後藤さんね。我々が今井先生の講義に出席させて頂いたところ、マッハの壁は越えられるかどうかというような話があったんじゃないかですか、多分その後ですよ。越えられるようになったのは。」

今井「そうでしたかね。」

後藤「流体力学で超音速のことが研究されるようになったのは、スーパーソニック・ジェットというものが出来てから？」

今井「出来てからですね。出来ない前から研究はあった訳ですけどね、そう真剣じゃなかったと思うですよ。一つは、プロペラに関する超音速理論ですね。飛行機自身が超音速になるということは、ちょっと考えられなかったんじゃないかと思うんですが、しかし、プロペラを使う場合、できるだけ速く廻した方が推進力がつく。そうするとプロペラの先端が超音速になるという研究はあったけれど、飛行機自体の超音速というのは、やっぱり戦後でしょうね。」

今井「講義といえば、僕のは本当に変わりばえがしないような気がしますね。最初演習をやるためにこちらに来たようなものでしょう。力学演習と物理学演習。それから、あと寺沢先生がお忙しいというので、先生が

しておられた力学 I, II, それから, 航空力学を少しづつやらされるような形だった訳です。ただし, まずやったのは 航空力学でしたかしら, それから 力学 II。内容は流体の方なんですけれども。弾性体の方は, 坂井卓三先生が, それから, 一般力学も先生がやっておられたんです。」

有馬「私達が今井先生の力学を, その後で流体力学を 2 年程続けて聞きました。」

後藤「橋本先生が, 演習で, 沢山問題を出された。」

高橋「今井さんと僕とはさっきいわれたように随分似てる所が多いので, 大体経験から言っても, ずっと一緒にいたから当然だけど。数物 (学会) の編集をやらされたのですよ。それでたびたび印刷屋にかよった。校正でね。S という字のスマール・キャピタルと, 小文字とは違うなんていうこともそのとき覚えた。それから, 今井さんも僕もローマ字は日本式です。」

木原「何か主義がおありになる訳ですか。」

今井「いや僕は日本式ローマ字の方が好きなんです。田丸先生の影響でしょう。先生の「力学」はローマ字できてますね。あれの第 2 巻の校正をやらされたんですよ, 卒業して大阪に居る時に。その前から田中館先生がよく, ニュートン祭などの機会に話をされて, それでローマ字に関心があった訳です。」

木原「日本式が伝統みたいだったようですが, だんだんとヘボン式の勢が強くなりましたね。物理学会の会誌も最初は Buturi がこの頃は Butsuri になりましたね。ヒゲトンとローマ字でかくと随分長いですね。」

高橋「長いですよ, 欲ばった名前ですよ。これはうちの田舎の祖父がつけてくれました。初めての子だもんで, 父が郷里の方に頼んで。」

木原「今井先生の講義はずっと, 流体力学と航空力学と弾性体?」

今井「それと一般力学。結局力学ばかりです。近頃では, 物理数学の一部分だけやったことがある。しかし, 考えてみると余り変わりばえのした講義はしなかったですね。その点は高橋さんと違う点であって。」

小柴「今井先生の講義でね, 実をいうと僕は消耗したんですよ。何故かという今井先生の講義は非常にきれいなんですよ。黒板にこういうのを解くにはこういうバウンダリー・コンディションだから, こういう函数を使ってこういう風にやれば, こういう答が出て, とスーとやっていくわけです。なる程計算なんてやさしいものだと思います。ところが家へ帰って読み直してやり直そうとすると全然出来ない。2 回か 3 回位はうかがったですかね, それで逃げだしちゃったです。」

実は。」(笑)

木原「その当時, 必須じゃなかったんですか。」

小柴「必須だったんですね。でも, とにかく試験は通ったんでしょ。」

木原「今井先生は字がきれいでですね。」

小柴「そうなんです。黒板にね, きれいな字で書かれると, 計算がいかに自分にも出来そうな気がするんですね。」

小柴「高橋先生からもやはり二度位。たしか電磁気の最初の頃です。四端子回路のお話があって。僕は今だに名前だけ覚えてるのは, テブニンの定理。名前だけしか今覚えてないですがね。黒板に向かって何か言われてるんですけどね。テブニンの定理が何だとか。何かこういうふうに書かれてる。書かれたんだけど身体の陰になって見えない。左手に黒板消しがあって。何書かれたかな, と思って写そうと思っているとこっちへ振り向く時に, サッと消されて。」(笑)

今井「講義というのは, やっぱり聞いた先生の真似をするということはないですかね。僕の場合には, 坂井卓三先生の講義というのが考え抜かれた明快な講義だったという印象を受けて, その真似というか。」

木原「坂井先生も字がきれいでしたね。」

今井「ええ, あの先生は本当に字がお上手なんです, それから先生はやっぱり問題をローマ字で書かれたですよ。」

小柴「先生の講義の時のイメージが 20 年経った今も残っているということは, やはり名講義だったんですよ。」

有馬「高橋先生の講義のノートをとにかく一生懸命とった訳です。仲々とり難かったことは事実だと思うんです。その時, 分なかつたのに 4, 5 年経ってみていくつか分ったところがある。だから, かなり程度の高い講義をしておられたと思うんですけどね。学生の時は, ともかく追いつくのがせい一杯で, その点今井先生の講義はノートがとりやすかったです。さき程似てるといっていただけですけどその点は違っていました。だからってとってつまんなかったという訳じゃないです。(笑) あとでフォローしやすかったです。」

木原「高橋先生の悪いくせは, 左手に黒板消しを持ちながら話をなさる。」

高橋「早く消しちゃうのは, 余り長く出しときたくないような, 自信のないところがあるからでしょう。」

有馬「高橋先生については, こういう時にいつも話になるんですが。たとえば回路でね。最初はカレントが左から右に流れるとおっしゃる, いやいや, 右から左に

とおっしゃる、最後にどっちでもいってサッとお消しになる。(笑) その後で、先生にあの時はこまりましたっていうことを申し上げたら、高橋先生平然として仰有るんです。『そりゃ、どっちでもいいんです』

今井「そうだと思いますね。」

木原「大体ね、どっちでもいっていうことを教える年齢が少し遅いですね。小学校でも中学校でも、何かこゝろはじめにきめて、きめたふうに覚えさすでしょう。」

高橋「そうそう、それがいけないんだ。」

小柴「単位系はこれでなくちゃいけないとか。」(笑)

今井「それから、スピードとヴェロシティを区別しなくちゃいけないとかね、速度というのはベクトルであって、速度を速さなんていっちゃいかなとかね、あんなのどうでもいいことじゃないかと思う。」

—————△—————

有馬「高橋先生の雑音の論文というのは日本語で出て、ずっと後まで翻訳なさらなかったということですが。」

高橋「雑音じゃなくてフィルター回路ですよ。」

有馬「どうしてですか。」

高橋「いや、面倒くさいから。英語でも書いたんだけど、しまいなくしちゃってね、それっきり。それでずっと後 URSI の国際会議の時に、たまたまある人にその話をした。日本じゃ全然反響がなかった。」

有馬「世界的にみて少し早すぎたのでしょうか。」

高橋「そういう訳でもないんだけど、何ていったって日本じゃ研究者の層がうすいから、流行している問題でないと何の反響もない。ただ自分としてはやった仕事の中では一番うまくいった問題だと思っています。」

有馬「何年位経ってからですか、翻訳は。」

高橋「ええ、翻訳したんじゃないで、その人に送ったら、ただ翻訳しただけじゃ分りにくいからと、もうちょっと丁寧に書いてくれた。」

有馬「それは日本語でお送りになったんですか。」

高橋「ええ。」

後藤「今でいう電子、その頃でいう電気通信学会誌に出された論文ですね。戦後に。」

高橋「あの頃のは紙が悪いですね。その上ページ数の制限があるからあまり丁寧に書けなかった。だから、紹介記事には原論文は too concise で、そのまま英語に訳したんでは分りにくいからと、断ってありました。」

小柴「20 年近く前ですが、先生は小穴先生のところへ、完全無収差レンズ系というのをもちになったことありませんか。」

高橋「そんなこともありましたよ。あの話は実は大学の学生の頃に思いついた話なんですけど、今はルーネ

ルグ (Luneberg) レンズとかいって、よく知られていますけれどね。」

小柴「その頃に私アメリカから帰って来て、小穴先生の所へ御挨拶に行った所、小穴先生が、こんなものもって来られても私には、分らないとか言って。」

高橋「要するに、レンズが球対称であれば、一つの方向で無収差なら、どんな方向でも無収差になるというわけ。球対称のものは、実用的には使えないんだけど、これを二次元にした場合はマイクロ・ウェーブのアンテナとして、使われているか、少なくとも使おうという提案ぐらいはあったらいいですがね。」

小柴「変分原理か何かで解かれましたか。」

高橋「積分方程式になるんですよ。学生の頃に考えたのは、一つの特別解なんです。それを積分方程式をちゃんと解いてやれるということに後で気がついた。」

小柴「原稿を書いたんだけど、どっかへ無くなっちゃったってお話がさき程あったでしょ、僕はねそういう点でもね後藤先生は嫡出子だと思う。二人の机の上を見ると。」(笑)

今井「高橋さんの机は一時はひどかったけど。」

高橋「今でもひどい。」(笑)

有馬「今井先生のお机はどうですか、きれい?」

今井「僕はね、本がずらーと積んである。もうダメですよ、図書館長以来ですよ。」

木原「書いたものが無くなっちゃうという話で思い出しました。今井先生、最近流体力学の本を岩波全書と裳華房とで出されましたね。ところが、戦時中、お書きになった原稿を、空襲で焼いたという話を聞いたことがあります。」

今井「函数論ですよ。」

木原「函数論ですか、原稿を本屋に渡してから、空襲で焼けちゃったんですか?」

今井「いや、そうじゃない、それは犬井先生ですよ、僕の場合は本屋に渡す前に。もっとも、全部じゃないんです。一部を書いていてね、あと嫌だなあと思っているうちに焼けちゃった。」

小柴「僕はね、今井先生に感銘を受けたことがあるんですよ。先生は御記憶ないかも知れませんが、メリーランドに居られた先生のお宅にお伺いしたとき、宮沢さんと一緒だったと思うんですが先生が手造りのお刺身を作って、ごちそうして下さい。ところが子供が何人もいてワイワイワイワイとび廻ってるんですね、今井先生は人間離れした計算をなさると思っていたのですがね。僕その時、聞いたんですよ『先生、こんなに廻りでワイワイやっていて、よくあんな計算が出来ま

すね』そしたら『慣れって面白いもんですね、こうやって廻りでワイワイやってないと、計算が出来ないんですよ』とおっしゃった。(笑)

後藤「高橋先生は、いつごろから計算機というものに興味をもたれましたか。講義では計算機の話は、伺ったことはないんですが。」

高橋「計算機というものには、昔のタイガー計算機の頃から興味があった。特に、あれで桁上げが伝わっていくところが、一番やっかいなことだということで、いろいろ考えていました。」

後藤「それはいつ頃のことですか。」

高橋「タイガー計算機にはじめて触れたのは、やはり東大に入ってからですね、東大には昭和9年に入ったのです。」

小柴「マンハッタンプロジェクトの話によりますとね、ファイマンが、IBMの事務処理機ですか、それを計算機に使えるんじゃないかと、興味を持ったのが昭和18年頃じゃないですか。」

高橋「あの頃日本じゃ山内先生なんかも微分解析器をやられていました。しかし、アナログ計算機には興味なかったな。やっぱり機械らしいものでない。」

小柴「先生、模型はもうなさらないんですか。」

高橋「勿論、今はもうしない。昔はやったこともあるけど。」

今井「この間高橋さんから本を頂きましてね、その序文を見ると趣味は何もない。数学が趣味だと。本当にゲームは何にもやらないんですか。」

高橋「やらない。」

今井「すもうも、野球も、テレビもあまり見ないと書いてあったが。」

小柴「先生、趣味でドライブがあるじゃないですか。」

今井「そう、そのドライブ以外は、ということ……」

後藤「僕は全然ダメですが、駅の名前をよく覚えておられますね。」

高橋「僕が駅名を全部覚えてるとするのは嘘ですが、でもまあ割によく知ってる。しかし別に努力して覚えようとして覚えた訳じゃないんだ。要するに親しみがあるってことで。皆が相撲とりや野球の選手の名前を覚えてるのと、僕が駅の名前を知ってるのと全然同じ訳ですがね。」

今井「駅の名前の順序が変わっても、どっちでもいってなことなんだろうな。」(笑)

小柴「高橋先生は碁を覚えると、これに夢中になるんじゃないかって気がするんですかね、先生、碁は全然やられたことはないですか。」

高橋「ないです。やっても夢中にならないと思う。僕はどうもね、ゲームっていうのはあまり好きじゃないなあ。一人で、ゆっくり考えられないものは……」

小柴「いや、碁っていうものは一人でゆっくり考えられるんですよ。」

高橋「でもね、あまりにも技術が多すぎて。勿論定理のようなものはあるんでしょうけどもね。だけど何となく数学的に不自然な感じがする。言い訳かも知れないけれどね。」

木原「今井先生の御趣味は何ですか。」

今井「僕も趣味は何もないですね。」

橋本「朝鮮碁をされたことがあるでしょう。」

今井「朝鮮碁ぐらいが限界というか。朝鮮碁ぐらいたと何か考えて、この手を打つといいだろうと想像がつく範囲なんですよ、ところが碁というのは、もっと、バラエティがあって、やるためには相当年期をいれて勉強しなくちゃいかん、それが恐ろしいですね、だからやる気がしないですよ。やればきつとりこになるんじゃないかと思うと。トランプにしても、ブリッジとか何とかをやるとね、きつと一生懸命やるんじゃないかという予感がする。ババ抜きぐらいたとね、そのために時間をかけるということはないので。」

小柴「今井先生が、碁に興味をお持ちになるよりも、高橋先生が碁に興味をお持ちになる確率の方が大きいと思う。何故ならば、今井先生は連続的なものに興味をお持ちだって印象がある。碁というのは、デジタルなものなんです。碁というのはちょっと相転移に似てるんですね、ある所までは何ともなくてね、ある一つのステップが入ったために、バサッと取られちゃったりね。」

高橋「とにかく碁にはうまい人が沢山いる。数学だって本職の数学者は沢山いるから同じじゃないかって言うかもしれないけれども、しかし我々の趣味としてやる数学は、本職の数学者はやらないんですよ。やっぱりいくらやっても、上には上があるんじゃない面白くない。」

清水「素人考えでは、計算機が碁をうつというんで計算機に卓越している人は碁が上手いだろうと思う。しかし頭の使い方は全然異質なものなんじゃないか。」

高橋「いや、異質じゃないでしょうね。確かに計算機をやってる人は、大体上手だし、異質じゃないと思いますよ。」

小柴「だけど碁はね、ロジカルにワン・ステップづつ考えてるんだと時間かかりすぎてダメでしょ。そこでサブ・ルーティンみたいなのがあって、ジャンプして答えイエス・ノーをかえしていく。そういうサブ・ルー

ティンのライブラリーを多く持ってるという定められた時間の中に相当大きな可能性があるということが出来ますね。」

後藤「似てるといえば、碁というのは一つ間違えば負けちゃうでしょ。プログラムでも一つ間違えば動かない。間違いが少ないという素質は似てると思う。沢山のことを考えてその中で、間違いの確率が非常に少ない。だけど、計算機のプログラムはそれだけが全部ではない。碁でも、読みを必要とするでしょ。読みというのは、ある程度、きまりきったことをやらなくちゃいけない。そういうことが上手な素質の人はプログラムも上手であるけれども。高橋先生は、そういうよく読みさえすればよいという所まで来たら、もっと新しい方法に進む。ただ、読みだけのところへ来ちゃったらもうトリビアルで面白くないという風感じられるんじゃないかと思います。」

高橋「僕は、上手くならないでしょ。だいたいそういう意味ではけっして僕は頭がよくないんだな。デジタルに論理的にものをフォローしていくのはむしろ遅いんだ。むしろ直観的に何となくわかってしまう方だ。」

小柴「これでいいんだというようにピンと来るんですか。」

高橋「ええ、それなら計算機はどうして好きかという、これも決して上手くないんだけど、計算機の名人というのが当時、まだ余りいなかったからでしょう。」

今井「趣味といえば、僕は日本語が好きなんですよ。日本語の文法とか。」

高橋「それも僕と共通なんだね。」

今井「そういう点が何かしら、共通した面があるんですね。」

小柴「文法のどういうところですか。」

今井「日本語の文法と、英語とかの文法との比較……」

木原「今井先生は外国語はお得意ですね。そして好きですね。」

清水「少し具体的に語学が好きだということを説明していただくと……」

今井「やっぱり、整理をするのが好きだということでしょうか。自分の書斎を整理することは嫌ですがね。日本語で我々話している時に、何か筋道というか法則がある訳ですね。そういう法則は、国語学者が教科書的な文法に作っているようなものです。しかしそれが唯一のものじゃなくて、もっと違った立場で統一出来るんじゃないかという、そういう見方に非常に面白い点がある訳ですがね。」

橋本「今井先生は文法の本をおかきになったことがあり

ますね。」

今井「機械翻訳についての日米会議というのがあったのですが、その前に、素人の日本語文法というのを、ちょっと『自然に』書いたことがあったんです。会議でそれについて、話をしようというので、ちょっとやったことがあるんですけどね。僕は国粹主義的なところがあるのかなあ、よく日本語というのは非常に、非論理的であるとか、英語などの西欧語に比べて論理的でないというけれど、それに対して反発を感じる訳ですね、そんな非論理的な言葉を日本人全体が使ってる訳はない、これを使っている以上は、それなりに筋が通っている筈である。結局、英語式の文法の形式にそって、日本語の文法を作るから非合理的に見える訳で、日本人の立場としてもし文法を作れば、もっと合理的なんではないか、とまあ、そういうことで、既成の概念から離れて、構成しなおすという風なところに興味があります。そういう点で、高橋さんと意見が一致しているということもあるんです。」

————△————

小堀「それではこの辺でロゲルギストのことをお話し下さいませんか。」

今井「これは高橋さんに引っ張り込まれたんで、高橋さんどうぞ。」

高橋「本にも書いてありますがね、ウィナーのサイバネティックスという本が出て、それについていろんな人が、いろんなことを言った時代があるんです。その頃、張本人は柿内さんなんですがね、柿内賢信さんがサイバネティックスのようなことの研究会をやらなかったと言い出して、いく人かで会をはじめた。その時のメンバーは今と違って柿内さんのほか、蓮沼宏さんとか、今いる近藤さんや、近角さんなど学習院の人達。磯部君もその頃からです。それで2週間に1回位、学習院に集って学問的な話をしてた。測定ということが話題になって、磯部さんなんか随分、資料を作って配ったりして結構「真面目」にやっていた。いまが不真面目というわけではないけれど。サイバネティックスの向こうを張ろうという気だったんですがね。ところがだんだん、先細りになって来ちゃって、一時、ほとんど途絶えかけていたのをなんとか続けようというんで、それじゃあとにかく、飯を食う会にしようということになって、それで夜どっかに食べに行って、そういう話をした。その頃はとにかくちゃんとしたものではないけれど、議事録のようなものを作ってた。その内に、とにかく金がかかってしょうがないしね、それに遅くなると追い出されちゃうでしょう。」



ちょうど近角さんが、大学のすぐ近くに居たんで、何回か近角さんの家でやった。但し、家に迷惑かけちゃいけないから、食事はどこかのものをとる、場所だけ借りるということにしていた訳です。その内に近角さんのところばかりにお世話になるのもということで、まわりもちにすることになった。しかも、お料理の方も家で何か作るようになって、だんだん御馳走の方に中心が移ってきた。今井さんなんか知ってるのは、その頃？」

今井「つまり食べる方が目的になった頃。」(笑)

木原「『自然』に載り出したのは、その頃ですか。」

高橋「自然に載り出したのは、近角さんの家で集まっていた頃です。ロゲルギストという名前もね、その頃に何か会の名前がなくちゃ困るということで学問の名前として logergics という言葉をつくったんだなあ。一方、どこかに載せたらどうだという話もあって、半年位したところで、『自然』の方に、木下さんがもって行った。話が突って、それじゃあグループのペン・ネームをとということであいう形が出来た訳です。」

小柴「ロゲルギストの語源は何です。」

高橋「ロゴスという、新約聖書ヨハネ伝頭の「はじめに道あり」の「ことば」でしょう。それからエルゴンというのは、まあ、エネルギーというか仕事っていう感じ。要するにロゴスはインフォメーションというつもりで、インフォメーションとエネルギーというんです。サイバネティックスはどっちかというインフォメーションの方に主体を置いてるけど、我々物理学者としてはエネルギー的な考えもそこに入れたものを作ろうというんで、そんな名前をつけた。名前と実と伴うかどうかはともかくとして。」

清水「執筆者をいちいち明らかにされていますね。記号ではありますけれども。それには何か意味が……つまり全体の合作ではなくて、主に考える人というか。」

高橋「あれは、はじめから合作って訳じゃなくて、実は余り、あすこの会で話したことと関係ない場合が多い。」(笑)

今井「食べるのに忙しくて。」(笑)

高橋「座談会的な形式になっているのも、全くの創作である場合もある。大概是、全くの創作でもないけれども、どれが誰というところまで、対応がちゃんとついている訳でもないという位でしょうね。」

清水「お一人の方が当番で、テーマを持って来られて、ある日の会話はそのことを議論されるのですか。」

高橋「ええ、はじめの頃はね。いや、そういう形では、はじめっから無かったんで、まあ集ったところで、誰

かが、何か問題を出すと、時によっては非常に議論が沸とうすることもある。でもこのごろは、ただの雑談の方が多。下手なことを書いて、後の会でこれはおかしいとか言ってだいたいたたかれることもある。」

今井「まあ、こういうことはあるでしょうね、今日集まった時にいろんな話が出て、その結論が出ないようなものを、誰か一人が自分の書く番に当たった時にそれについて相当考えた結果を書く。そういう場合の方が、むしろ多いのじゃないですかね。」

高橋「そうですね。大概せつばつまって書くので、あらかじめあそこで話題にして、皆の反応を聞くなんて暇はないから、この頃は。(笑) 前はそうでもなく、少しはストックがあったんだけど、だんだん続かなくなっちゃって。」

清水「議論は沸とうしても大体落ち着くのでしょ、皆さん同じような考え方を持っておられて。」

高橋「まあ、ねえ。」

清水「結論が分れたまま、執筆しちゃうってこともありますか。」

高橋「大体ね、別にそこで結論を得るために話を出す訳じゃないんで、むしろそれに対して、どういふふうな考え方があってことをきくのが目的なんでね。結論が出るものなら、わざわざもち出さないでもいいんじゃないでしょうか。教育っていうことが非常によく話題になる、特に物理教育。そこで、ロゲルギスト物理読本なんてのを作ろうなんて話もあるんだけど、しかし皆で合作でやることは無理だろうてのが、本当は僕の考えで。」

今井「話題になって、全然書かれないのは例の超能力。」

小柴「そういうのこそ、ロゲルギストで書いて貰わなくちゃ。」

今井「全体としての結論がない。やっぱり意見の相異がある訳で。」

木原「この間のニュートン祭での高橋先生のお話の中に『役に立つものは真理である。だから超能力も役に立てば真理と認めざるを得ない。』とありました。」

小柴「そうすると、テレビ局にとっては超能力は真理になる。」(笑)

清水「超能力で、信頼度の高い通信が出来るのなら真理ということでしょうか。」

後藤「物理学者からみた数学教育への、注文なんてのは話題にならないですか。」

高橋「そうね、あんまり話題にならなかったかな、まあ理論屋さんが半分位だけど、数学のことは。」

木原「時間も無くなりましたので、この辺で。」